

令和 8 年度 第 1 回神戸市総合教育会議

と き 令和 8 年 5 月 1 日 (金)

10 : 00 ~ 11 : 30

ところ 神戸市役所 1 号館 14 階 大会議室

1. 開 会

○久元市長

本日は市立高校のあり方について議論をいただければと思っております。神戸市の市立高校のあり方につきましては、教育委員会において検討委員会（これからの市立高等学校のあり方に関する有識者会議）を作られて、一定の方向性が出されていると承知をしております。その後、高校をめぐる状況というのは、かなり大きな変化がありました。この4月から高校授業料の無償化が始まり、高校生がいる世帯の負担軽減につながっているということは間違いのないわけですが、同時に全国で公立高校離れというものが起きています。兵庫県におきましても、県立高校の倍率が1倍をきるということが非常に大きく報道をされ、関心も高まっていると思います。そういう中で、神戸市の市立高校は今後どういう役割を果たしていくべきなのか。また、前提として、公立高校は私立と異なる役割を果たすべきなのか、あるいはそういう違いはないと考えるべきなのか。そのような基本的なところから出発して、神戸市の市立高校が果たすべき役割や、その役割を踏まえた今後の方向性、またその方向性を実現するための道筋、方策ということについて、今日は集中的にご論議をいただければと思っておりますのでよろしくお願い申し上げます。

2. 議題 市立高校の今後のあり方について

資料1「市立高校のさらなる特色化・魅力化にむけて」について、教育委員会事務局より説明。

○久元市長

それでは今説明がありましたように、資料1の21ページの各項目の議論をしていきたいと思えます。この議論に入る前に、市立高校の現状、それから国の示しているグランドデザインについてもこれからの市立高校を考える場合の指針になると思いますので、こういう現状と市立高校を

取り巻く外部環境について、ただいま説明のあった資料への質問も含めて、ご意見・ご質問をさせていただいた上で、各項目の議論に入っていきたいと思います。

○正司委員

今月に入って、市内の全日制5校をすべて拝見させていただいて、私自身、神戸に生まれ育っているので、市立高校のイメージはつい40年前、50年前のイメージを持っていましたが、5校とも特色化が進んでおり、本当にずいぶん変わったなと今さらのように感じました。私立も女子校の共学化など大きな改革をされていますが、それに負けないような改革を市立もしているので、この倍率がなんとか維持できているのかなと思います。羨ましいと思うのは、私立より施設面で余裕があるなという気がした点です。設備もそうですけど、スペース的にもゆとりがあるので、それがうまく活用できているし、もっと活用できればいいと思っています。あと、神戸市の場合は、高校の先生も中学校で教えた経験のある人が結構いるというお話を教育委員会の方に伺い、中学での学習内容がうまく身につけていない子供たちのフォローができるような環境になっているのではないかなと思いました。別に中高一貫校ではないですけど、公立中学に行っている子供たちが市立高校に来ていますので、その点もメリットかなというふうに感じます。

○久元市長

私もこの4月に5校全部駆け足でまわりましたが、正司委員と同じ印象を持ちましたね。非常にスペース的にゆったりしているということは確かに感じました。

○福本教育長

いわゆる高校授業料の無償化ということが、この議論の背景として言われておりますが、現実的な話としては、やはり私学の方がお金はかかります。無償化といっても、やはり私立高校の方が授業料以外の費用負担がたくさんありますので、そういう視点で見ると、公立が一定のセーフティネットのような役割を果たしていくことについては、引き続き重要ではないかと思います。

これは県立・市立問わずの役割ですので、確認をしておいた方がいいかなというふうに思います。

○山下委員

（他校の事例紹介にあった）こういう設備を使って、実際に生徒さんたちがどんなふうに学んでいるのか、またおそらく学校の先生方も研鑽されているのではないかなと思いますが、先生方の研修等について（視察を通じて）何か手に入れられた情報等があれば教えていただきたいの一点。もう一点は例えば、京都の堀川高校の場合も京都大学の大学院生が参画してくれているというように、とりわけ探究型の学びの場合には、こういう外部からのサポートがどうしても必要になってくるのかなと感じますが、企業あるいは大学等も含め、どういうふうな形でサポートがあったかということも教えていただければと思います。

○教育委員会事務局

まず一点目、先生の研修というところですけども、まず生徒の探究の幅が非常に多様化している中で、教員がこれまで培ってきた知識だけでは対応しきれない部分は、正直たくさんあるのが現状です。ただ、そういった場合に長期休業中を利用した教員の企業への研修などを進めていくというのが最近の流れかと思っております。また、大学生もしくは企業の方々にお越しいただくチューター制度であるとか、外部の方々に探究の時間に教えを乞うということも、企業との連携の中でどんどん進めていかないといけないというところです。生徒の探究を充実させるためには、こういった外部との連携が必須というふうに考えておりますので、教員のスキルアップと合わせて、今後の課題であると感じているところです。

○今井委員

その他の学校での教員の研修や外部との連携について、公立の京都市立とか尼崎市立では、学校独自でどこまで実施し、教育委員会はどこまでサポートしているのか、教育委員会の関わりについて、もしわかれば教えていただきたいです。

○教育委員会事務局

教員が普段の業務をこなしながら、外部との連携を進めるのは非常に難しい部分が正直ありまして、やはり教育委員会、設置者の持っている資源を活用しながら、教育委員会が間に入って運営していくということもなくてはならないことだと思います。例えば神戸市においては、各部局の方々にお力を借りるということは、各市町の話をお伺いしていても同様のことだというふうに確認しております。

○今井委員

他の市ではコーディネーターみたいな人が配置されているとか、そういう事例はありましたか。

○教育委員会事務局

都道府県においては、学校コーディネーターという存在が、こういったことを担うということも聞いております。ただ、常時かつ多数の高校に配置されているかという点、まだ不十分かと思えます。

○本田委員

市立高校というのは、県立に比べると数が少なくても、様々な特徴を持って運営されているところで、教員の確保といった採用面、研修、異動等、人材を育てながら配置していくというところで課題や工夫されていること等があれば教えていただけますでしょうか。

○教育委員会事務局

確かに、これだけ多岐にわたる教育課程を実現していこうと思いますと、非常に専門的な技能能力を持った教員が必要になります。それにつきましては、事務局の教職員人事課はもちろん、加えて学校現場が、大学とか企業の方々と連携していただく中で、見つけてきていただいた人材

などの情報なんかもいただきながら、本当に子供たちの探究、そして教育課程を実現させるためにどのような人材が必要なのかということを、十分に情報共有をして、教職員人事課の方で人材確保しているというところです。

また、専門学科や、単位制の高校普通科の方でも、様々なカリキュラムがあり、選択授業など持っておりますので、非常に専門分野の知見が高い教員と、まだそこまでではない教員がお互いの情報共有や相互の研鑽を通じて、お互いの知見を高めるというようなことに、すでに正規教員として配置している教員たちの異動に関しましても、今取り組んでいるところです。

○吉井委員

文科省の今回のグランドデザインでは、特に最初に、専門高校の機能強化・高度化の中で、地域産業との連携というのが書いておられます。しかし、筆頭に挙げていながら、なかなか具体的な中身っていうのは記載がされてない、見えないというふうに思いまして、具体的に何か文科省が出されているタイトルに対して、具体的な方針ですとか、ガイドラインですとか、そういったものがあるのか、確認をさせていただきますでしょうか。

○教育委員会事務局

特にこれ以上何か具体的に出ているものはございません。一方で、他都市の学校におきましても、先進的に取り組まれている事例、産業界との連携であるとか、技術的なノウハウを企業様と連携してやっている事例がございますので、そういった事例を神戸市としても吸収しながら、可能であれば、もう一歩先も含めて取り組んでいくことが求められているのではないかというふうに考えてございます。

○久元市長

学科のあり方について、普通科の学科再編というのは、具体的にどのように再編をしようとしているのか、その考え方が示されているのか教えていただきたいと思います。あわせて、現状、

市立高校も「文系・理系の区別がない」生徒が全体の 38.5%となっていますが、この文系・理系区別がない学科というのはどういう学科になっていて、それからどのような授業内容なのか、想像で言うと、文系の学ぶ科目と理系の学ぶ科目が両方をミックスしたものを学ぶというようなイメージなのか。この「区別がない」というのはどういうことかについても教えていただければと思います。

○教育委員会事務局

まず普通科の改革でございますけれども、これまでは画一的・平均的な知識を身につけて社会に出るということを想定したような分野、すなわち、専門学科や専門高校とは異なり、一般的に共通して得ておくべき知識を学ぶイメージで、普通科を持っていたわけでございます。今は、そういう時代ではなくなっているということで、どの分野かは別にして、特定の分野を学ぶようなことができる学校、もしくはできる学科というふうに再編をしていくということが求められております。

次に、神戸市の市立高校における「区別なし」については、資料 1 の 7 ページの下の方に四角囲みで書かせていただいています。文科省の括りで、「区別なし」になっていますのが「総合学科」、神戸市では須磨翔風高校がこれにあたります。また、「普通科の単位制」は、神戸市では六甲アイランド高校がこれにあたります。市長、教育委員の皆さんにもご覧いただきましたが、これらの学科においても、実際には学んでいる内容が理系に寄っているという生徒もあり、個別に分析をすれば文系、理系に分けることもできるかもしれませんが、文科省の括り上「区別なし」となっておりますので、そのような表記をさせていただいているのが現状でございます。

○久元市長

単位制というのはどのようなものなのか、わかりやすく説明していただければと思います。

○教育委員会事務局

これまで普通科は、専門高校でもそうですが、学校でカリキュラムを組みまして、想定している時間割に沿って学んでいただくものです。一方、単位制というのは、各々個人で用意をされた教科科目の中から選んで、その単位を習得するものになりますので、選べるというのがメリットになります。

○久元市長

選択制ということですね、ありがとうございます。

続いて、議論に入っていきたいと思いますが、市立高校がどのような役割を果たすべきか、というところから議論に入りたいと思います。さきほど福本教育長からは、公立高校はセーフティネットの役割を果たすべきだというご指摘もありましたが、これは非常に基本的なところなので、大事な論点かなと思います。ご意見いかがでしょうか。

○正司委員

セーフティネットというのは、経済的な面だけではないと思うんですね。私立高校はそれぞれの建学の理念に即して、独自の入試で生徒を選んでいる。それぞれどういうタイプの生徒が欲しいって言うのはある程度の像があって、それに合う生徒を選んでいるわけで、それが神戸市にたくさんいる中学生の皆さん全員に及ぶのかというと、そういうわけでも決してないと思います。また、私立は中高一貫になっているところも多いので、高校の段階で選べるバリエーションがそこまでないということもあります。そうすると、やはり高校の段階で、歴史的に公立高校があったということもあるのかもわかりませんが、公立高校が一定の地域のニーズを鑑みながら、市立ですから市の方針も意識しながら、高校を作るという意味があるのではないかと。それは積極的な意味でのセーフティネットということになるのではないかなと感じています。

○山下委員

正司委員がおっしゃったように、福本教育長もおっしゃったセーフティネットっていうのは、おそらく単に経済的に困窮されているような方が救われるっていう意味以上に、通っている生徒の気持ちの問題や、心理的な状況の問題も含めて、かなり神戸市立っていうことが大事になってくるような側面もあるかなと思います。というのも、私立の学校とはどこが違うかということになると、やはり地域に支えられているっていう意識が生まれてくるのかなということを、この間、学校をいくつか拝見する中で、痛感したところです。今の高校生は、全国的な傾向ですけど、潜在的に地域貢献したいと思っている高校生もいるみたいで、特に過疎地なんかではそういったことがよく話題になりますが、神戸市でもそういうのはあるのではないかと考えています。そういった意味では、地域に支えられたからこそ、今度は自分たちが地域を支えるというような意識が芽生えているのではないかなと。先ほどアンケートで答えられた内容も、そういったことを反映しているのかなということを思っている次第です。そういうことを考えたときに、私立学校や県立学校とは違う、独自の存在意義っていうのがあるのかなと考えているところです。

○本田委員

セーフティネットという用語がぴったりくるかわからないですけども、そういった地域に根ざすっていうところでは、今、小学校、中学校でも、地域の方と何か一緒にするような授業などがあって、私たちもスクールミーティングに行かせていただいた時に、もっと地域の人と交わりたいとか、自分たちの住んでいるところをもっと知りたいという児童生徒がいらっしゃいます。教育委員会の中でも、中学校と高校の先生が同じところにいるということで、本当に小中高とずっと続きながら、神戸市の中で産業界の方や地域の方々と一緒に育てていくっていうようなところは、すごく特徴なんじゃないかなと私も感じております。

○今井委員

皆さんが言ったことと重なると思いますが、やはり幼小中高とつながっていく。そこへの子供

たちの安心感もありますし、保護者から見た安心感もある。さらに彩り豊か、バラエティに富んだ、それぞれの学校の特色があって、本当に楽しく選べるようになっている。とはいえ中三で高校を選ぶ時にまだどう自分が今後生きていきたいかって、そこまで固まってない子ももちろんいるし、自分の好きなことがすごく見えてきて、こんなことやりたいっていうお子さんもいる。色んなお子さんそしてそれを支えるいろんな保護者がいる中で、いろんな選べる選択肢があって、その選択肢になり得ているっていう、本当にいい形で市立高校の役割があるのではないかと思います。

○吉井委員

私は県立高校と市立高校の存在価値の違いというのを、教育委員になるまであまりわかっていなかったのですが、いろいろ教育委員会の方から教えていただいて、そういう果たすべき役割は若干違うのだなということを理解してきています。つまり、市立高校っていうのはより地元に近い、地元の産業にも近い。そのニーズに沿った形でカリキュラムも作られている。県立はそこまで地域に密着した形ではないのだなというところに少し違いがあるということを、最近によく理解をさせていただきます。そういう目を見た時に、今回市立高校5校をまわらせていただきましたが、お子さんが中学校から高校に入るときに選択するのに、その5校は選択肢が全部揃っているみたいなイメージを持っています。5校しかないですが、それぞれ特色があって、自分の将来や目指す姿を考えた時の選択肢の一つぐらいは入っているなというのを感じています。という意味で、神戸市の市立高校は良いバランスであるなとそういうふうに感じています。

○久元市長

私立と公立は何が違うのかというと、一つは教育長からお話がありましたセーフティネット、これは経済的な面だけではない幅広い意味を持つべきだという議論はわかりました。学校によって違うかもしれませんが、やはり授業料が無料になっても授業料以外の負担が私立の方が大きいというのは、そう言えるのでしょうか。

○教育委員会事務局

この度の高校授業料の無償化は、名の通り授業料の無償化でございます。この機会にあくまでも神戸市教育委員会事務局で調べた範囲ですが、私立の場合やはり施設使用料の類の経費がかかっているようにございます。学校によって様々ございますが、いくつか拾ってみたところ、年間で十万円前後の金額がかかっている学校が多くございまして、ここは授業料無償化の対象外になっておりますので、そのご負担は親御さんにとってはあるのかなというのはわかってまいりました。

○久元市長

そのような費用は、市立高校の場合には基本的には不要なのですね。それから連続性という議論がありましたが、連続性ということから言うと、私立は正司委員がおっしゃったように、中高まさに連続しているわけですね。小学校からの場合は小中高と連続しているわけです。そうすると市立高校における連続性っていうのは、何が違うのでしょうか。

○山下委員

拝見している限りで申し上げますと、神戸市民を育てるという一点において、その連続性の芯が通っているという気はしています。先ほど教育長のご説明を改めて伺って、やはり歴史的な経緯としては、本当の意味でのセーフティネットとして、「15の春を泣かせない」という時代に作られたという経緯が全国であると思います。市立高校の場合、当然神戸市在住の生徒さんが多いわけですが、目の前の生徒さんたちにどうやって向き合っていこうかと先生方が思考される中で、神戸市の教育を受け、そしてこれから神戸市に巣立っていくにあたって、どういう教育がふさわしいのかということを試行錯誤して模索されてきたのかなということを思っています。これまで市立高校も再編があり、何故このような便利な場所に市立高校があるのかと思っていたのですが、意図的な再編であったっていうことを伺い、きちんと考えた人がいたのだなということを感じた

次第です。そういう意味では、神戸市民を作っていく、次世代の市民育成をするっていうところで筋が通っている部分があるかなと感じた次第です。

○久元市長

国際都市なので神戸市民を育成するということも大事だけれども、神戸からやはり世界に羽ばたいていく人材を育成する、つまり市立高校が地域に近くて、密着しているとそういう人材が育っていくということは事実ですけれども、同時にそれだけでない役割っていうのもあるかもしれないというのが感想です。神戸の公立小学校、中学校、高校で学んだ人材を神戸の中に閉じ込めるのではなくて、グローバル社会の中で幅広く羽ばたいていってもらえるような、そういう役割を市立高校も果たすということも合わせてやる。そういう意味で私立の場合には、それぞれ建学の理念といった精神というものがあって、やはり共鳴する人たちがそこに行く。それに対して公立高校っていうのは幅広い高校に行かせたいという市民のニーズに応えられるような内容の教育をするということ、その中では、地域の産業界、あるいは市民との間の距離が非常に近くて、地域に密着をしている内容の教育をするというところに市立高校の役割があるかもしれないと今日の議論をお聞きして、なんとなくそんなイメージを持ちましたが、いかがでしょうか。

○本田委員

グローバル人材を育成するといったときに、今グローカルと言われますが、自分たちの住む地域をより良くしていくという地域創生の考え方がそもそもベースにないと、なかなかそれをグローバルに発展させていくという考え方ができないのではないかと思います。この地域を良くするためにどういう世界があるのか外の世界を見て、また中へ取り入れるというようなグローカルな人たちを育てていかないといけないのではないかと、常々大学でも思っているところであります。こういった神戸の地を生かして、グローバル人材を育てるっていうのは、とても親和性があるのではないかなと思っております。このアンケート調査の中で、異なる文化とか、価値観を育てるっていうところを、もう少しこれから力を入れないといけないのではないかと事務局からの

ご説明もありましたが、まさに地元をより良くするために、どういう価値観で外の世界を見ていくのかっていうところを強化して行くと、本当の意味で両方の人材が育つのではないかなと感じています。

○福本教育長

私は中学校の教師だったので、送り出す側から見ると、市立高校は大きく変化してきました。進路を決めましようと言った時に、本当に子供たちや保護者は市立高校への進学を希望されるのですが、先ほどから委員の皆さんが言っていたとおり、親しみを持っている。年々難易度があがって入学が難しくなっていますが、そういう選ばれる学校に市立高校はなっています。その先大学に進学や就職した先輩たちがこうだったよということを書いてくれるので、下の子がそれをみて目指していくようないい循環が今できています。大学に行った先だけが全てではないという前提で話しますけれども、市立高校出身者がもう日本全国の大学に行くようにもなりました。地をしっかりと安心できる環境で固めて、自信を持って指導を受けて、外へ飛び出していくという形が市立高校はできているのかなというふうに思います。

○久元市長

非常に明るい方向に向かっているということですね。そうすると、役割の議論はかなり明確になってきたと思うので、今後どういう方向を目指すべきなのか、具体的なハード・ソフトの施設整備についてはこの後にしたいと思います。例えば学科のあり方とかですね、グランドデザインも踏まえた学科編成のあり方とか、そういう目指すべき方向性ということについてはいかがでしょうか。

○正司委員

文部科学省の括りでは普通科は文系となっているようですが、普通科は本来ジェネラリストをつくるという目的で、実際理系の子も結構いるし、普通科イコール文系教育をやるところじゃな

いです。たしかに、おそらく大学入試を意識して、大学生の人数は私立が多く、私立は文系が7割ぐらいかと思いますので、それを受けて文系の割合が結構高いのと、もう一つは数学とか物理・化学を中学校ぐらいで嫌いになってしまって、そのままそれを深くは学ばなくていい文系に普通科では流れがちとなっている。そういう意味では、非常に外発的動機で学んでいるのだと思うので、これはまずいと思うんです。やはり学習というのは学校だけであるわけじゃなく、社会人になってもずっと続けてもらわないといけない。続けることに価値があるし、それに喜びがあるはずなので、そういう内発的動機の楽しさ等を教えられる高校があったらいい、だから文部科学省も探究学習をやろうという話になっているのだと思います。そして、座学だけじゃなくて、探究学習がそういう形で内発的動機の喜びを学べる場になるといいなと思います。施設環境も、もちろん先生方もカリキュラムも大切ですが、それとともに生徒同士がワイワイできるような施設とか設備もそこに合わせてあるといいなというふうに思います。ただこれやるには基礎が必要であり、その基礎を教える時間を下手に削ると良くないので、そのバランスをよく考えないといけないと思います。

○本田委員

神戸市立の高校っていうのは先ほど吉井委員も言われたように、数少ない中でもそれぞれ特色があり、そしてなかなかバラエティにも富んでいるというところで、今の方向性自体はすごくいいのではないかとと思っています。その中で、ローカルからグローバルな人材を育成することを意識するということは、まだ必要なかなとはもちろんと思いますが、現状がニーズとしてあるからこそ、倍率も維持しているっていうところもあると思いますので、今が悪いとは思っていないという感想です。

○吉井委員

今回、まわりました5校については、大変探究型の学習をしっかりとっておられます。それぞれの学校が各々の方針を持って、しっかりとっておられるなというのもすごく感心しました。

今回のグランデザインの冒頭にありました少子化や、生産年齢人口が減るというのは、自明なわけですね。そうすると、企業はどういうことを求めているかということ、人がいなくてもものづくりができるような工場・ラインを作ろうとしていっています。そうすると、今高校生たちに望むことというのは、そういうラインが作れるようなAIやロボットですとか、そういう技能知識をしっかり勉強してほしいと思います。もちろん基礎的な機械、電気という知識も必要ですけども、その上で全く新しい発想をしていかななくてはいけないので、その時必要になるのはAIやロボットに関する技術、能力になります。市立高校では、まだそこに特化したカリキュラムはあまりなかったように思うので、そのような変化を求めたいと思います。

○福本教育長

子供たちの特性を伸ばしてあげるということであれば、県立との関係もありますが、入試制度を触ってみるというのもいいかなと思います。推薦入試もありますが、基本的には5教科での入試になります。オールマイティな能力だけでなく、優れた能力をさらに伸ばしてあげるような感じで。バラエティに富んでいる5校を持っていますので、トータルで考えてそういう入試制度も面白いのかなと思います。

○久元市長

どのような入試をしているのか、学校によって違うのか、市立高校は県立とどう違うのか、できるだけ簡潔にわかりやすく事務局から説明してください。

○教育委員会事務局

基本的には県立高校も市立高校も入試制度は一緒です。同じ5教科の入試問題500点満点のテストを行うとともに、中学校の平常の授業の様子などを加味した評定とを合わせて合否を決定しています。それ以外に推薦入試、特色選抜というのがありまして、特色のある学科において、子供たちの興味関心に応じて、小論文とか面接等で適性を図っているという状況です。

○久元市長

推薦入試・特色選抜以外の入試は、科学技術高校も葺合高校の国際科も、単位制のところも全部同じ5教科ですか。

○教育委員会事務局

おっしゃる通りです。すべて同じ問題を解いております。

○久元市長

今日は決める場ではないですが、教育長は問題意識を持っておられるということですね。

○福本教育長

数学が得意で、ものづくりが得意な子供が例えば国語で足を引っ張られたとした時に、思い切って入試を神戸市立高校でやっていくのも一つかなというふうに思います。

○正司委員

高校が特色化して独自のカラーを出すというのは、入学段階からこういう子をとるという表示も必要であり、その一つの現れが入試問題になるので、今のように公立全部が同じ問題と内申書であるというのは、特色化とそぐわないと思います。

○久元市長

市立高校で独自の入試を実施するということは、市で問題を作成しないといけなくなるということですね。

○教育委員会事務局

そうです。

○久元市長

入試の件は教育委員会の中で議論してもらえればと思います。ただ今日の議論では、入試のあり方もこれから考えていこうということによろしいですかね。

○山下委員

議論の場ということで、あえて反論というほどではないですけど、大学教員としての立場から言うと、実はオールマイティにやってくれることはありがたい面もあるんです。例えば、各教科の学習を、「知識、厳密には情報を習得する」というレベルで捉えるのか、それとも各教科が前提としている「考え方」を学ぶものとして捉えるのかによって、考え方が変わってくるかもしれないですけど。国語なら国語の見方、社会科は社会科の見方、理科ならば理科の見方、ものの捉え方っていうのがあって、その本質や真髓をわかっている人に大学に来てほしいかなと言うのはありまして。例えば数学のものの捉え方の良さっていうのは、ほかのものの捉え方ということを理解した上で相対的に見えてくるという面もあると思うんですね。そこはすみ分けということになるかもしれませんが、そういう点も大事にするところもあっていいと感じます。

○久元市長

昔のことなので忘れてしまったんですけど、国語、数学、理科、社会、英語、それは科学技術高校でも同じように勉強するんですね。以前に、ある高校に行ったら、神聖ローマ帝国の授業をやっていたんですね。科学技術高校の生徒は、神聖ローマ帝国よりもAIの方を勉強したいと思うかもしれませんね。学科についても今後議論するということにしておきたいと思います。

残りの時間は、具体的な方向性をにらみながら、施設整備、あるいは学校環境について、他の高校の参考になる事例を集めていただいたので、文科省の方向性や、今の学科の状況、これは大

きく変える必要がないということだったと思いますけれども、それらを踏まえながら、これからどのような施設、設備、環境が必要なのか。個々の機器も含めて大きな考え方として、市立高校の施設、設備、環境、雰囲気等のハードとソフトについて自由に議論をしていただければと思いますが、いかがでしょうか。

○今井委員

今回、市立高校をまわらせていただいた中とアンケートをとっていただいた生徒さんたちの声というところでいくと、生徒さんたちからも要望が高いのはトイレの整備となっています。高校に限らず、トイレが綺麗で行きやすいついていうのは、本当に子どもたちにとって死活問題というか、それくらい大きなことなので、すごく大事なところかなと思っています。あと、高校を事前にまわらせていただいた中で、どこの高校からも体育館の空調が厳しいというお声は皆さんお聞きになった通りで、今、夏が長いので3ヶ月、4ヶ月ぐらいほぼ使えませんという声を聞くと、せっかくのこれだけのアリーナ、体育館が使えないというのはもったいないし、避難所になった時にも大変なことになるので、体育館の空調はすごく大きいかなと思います。あとは、探究学習がすごく活発になっていっている中で、みんなで話し合う時のスペースとかホワイトボード、机椅子など、学校ごとに子供たちのニーズ、先生の声はいろんなお声があるので、それらを踏まえながら学校ごとのニーズに応じた整備っていうのは続けていく必要があると思っています。

○本田委員

今回、市立高校をまわらせていただいたところで、探究しようという各学校が、例えば昨日の高校では職員室の前に子供たちが勉強できるスペースを工夫して作られたり、本当に自助努力でいろいろされているなと感じました。いろんな人と学び合いながら、せっかく対面で授業をしているので、授業以外のときにみんなといろいろディスカッションできるような場、フリースペースであったり、椅子と机があるだけでもいいかもしれませんし、今も努力されているなとすごく感じました。本当に設備面は、お金をかければ、いくらでもできる場所かもしれませんが、例

えば科学技術高校だったらこういうところがとか、高校によって優先順位がそれぞれ異なると思いますので、ニーズを教員側そして生徒側から聞きながらやっていくということがすごく大事なかなと思います。今 IT の話もされていましたが、校内の Wi-Fi 設備とか学習にそもそも支障が出てしまうという話はいくつか学校で聞きました。また、空調とかトイレというのも災害時も両方ともすごく大事なところになりますので、そういったところから順番にということになるのでしょうか。

○久元市長

トイレは改善の余地があるっていうのが大体事務局の認識ですかね。トイレは中学校では予算を計上して綺麗にしたと思いますが、市立高校はまだ改善の余地があるんですか。

○教育委員会事務局

大きく二つあるかなと思います。一つはまだ全部が洋便器化されてないところが残っております。整備した当初は理由があって整備したところもあるかなと思いますが、それが若干残っておりますのでやらせていただくこと。あとはスペースとしても見た目が暗い感じを白い壁で明るくするとか、下のタイルなどそういうトイレ自体の雰囲気とか入りやすさ、居心地の良さといった改善は社会の流れに沿って実施する余地はあろうかと思っています。

○本田委員

子供たちの中には、病気とかいろんな障害を持ちながら学校へ進学される方も増えてきています。私が病院で勤めている時もそうでしたが、受験する高校を選ぶときに、市立の学校はアクセスがいい場所にあると思いますが、加えて、エレベーターがどれくらいあるのか、親が送り迎えできるスペースがあるのかというところも選ぶ基準になっていました。特に車椅子が必要な子供さんとかがそうですね。バリアフリーは今後もっと大事になってくるかなと思っています。

○正司委員

生徒たちが学校に長居したくなるような雰囲気のあるデザインの学校になればいいなと思います。別に遊びの会話でもいいのですが、友達といろんな共同作業をすることの喜びというのは、冒頭申し上げた内発的な学びの大切さに気付くきっかけになると思うんですね。座学ばかりだとしっかりと学べないというのはラーニングピラミッドをひきながらよく聞く話ですけど、お互いに教え合うことがあると、よりいろんなことを学ぼうということに繋がる。高校時代の学びというのはそこで終わりではないので、さらに大学に行って学ばないしは社会に出て学ばないと、そういうふうに学び続けるきっかけになる。それには施設面ではスペースが必要ですし、そこにホワイトボードがグループごとにあると、みんなでワイワイ意見を書きながらできるので、随分変わると思います。ただこれらを先生方が全部ケアするのは大変なので、どうするのかという問題があると思います。

○福本教育長

アンケートでありましたが、志望理由のところにおいて、各校が特色を出してきたところがすごく評価されているんですね。また、一定立地も良くて施設も新しいので、その点も評価されていますが、「学校の雰囲気が良い」というのが低いんですね。これを考えていまして、「学校の雰囲気が良い」が低いっていうのは何かかと。子供たちが施設ではなく雰囲気と言うのは、学校のトイレの問題や大きな施設というよりも、どちらかといえば入った空間でワクワクするようなところとか、そういうところが今欠けているのかなという気がしています。もうひとつ部活動の充実っていうのが低いんですけど、これは別に考えるとして、学校の雰囲気が低いというところが出ていますので、このあたりの要因を子供たちに聞いていくのも一つかなと思います。せっかく中身で充実して支持を得ているわけですから、あと残り何が足りないのかっていうのをもうちょっと考えていけたらと思います。

○吉井委員

施設面ではない側面からアンケートの結果を見ても、地域企業との協働してみたいというのが82%あって、科技高や六甲アイランド高校は、一部企業との連携をやっておられましたけれども、それはきちんとした形で提携をして地域の産業なりと連携をやっていますかという話をすると、そうではないというようなことでございました。この、地域産業との連携というのは、例えば神戸でいうと神戸商工会議所ですとか、兵庫工業会ですとかそういったところと教育委員会とで提携をして、プラットフォームを作って、推進していくというような形にすると、生徒のご希望にも沿った形で進められるのではないかなと思います。

○久元市長

企業と連携のプラットフォーム的なものをこれから作って、関係者が集まってそこでしっかり議論するということですね。また、いろんな高校の施設、設備の状況を説明していただいたので、真似する必要は全くないと思うんですけど、ここを参考にして、こうしたいということがありましたら、ぜひおっしゃっていただければと思いますが、いかがでしょうか。

○山下委員

学びのスペースについては、毎年少しずつ机や椅子を組み合わせることによって、グループ学習が2人から、5人とか、台形になっているような工夫された仕器が展開されているので、それを少しずつ拡充していくというのが一点。また、時代の流れかと思いますが、いわゆるパブリックスペースが一箇所に集中的に設けるのではなくて、局地的に設けられています。市立高校を拝見したときも、そんなコンセプトは見受けられました。そのパブリックスペースの居心地の良さみたいなものを拡充していくのはあるかなという気がしました。

○本田委員

先ほど産業との連携っていうのもありましたけれども、神戸市にいろんな施設がありますけれ

ども、そこと連携することによって、学校内の施設や設備の改善していく余地もあるのではないかと思います。例えば大学とか企業が使わなくなったとは言いませんけれども、そういうものを一緒に使えるであるとか、施設を共有できるであるとか、連携することによって教育委員会、神戸市だけの力だけじゃなくても充実した施設、設備を求めていけるのではないかと思います。

○今井委員

市立高校をまわらせていただいた時に、それなりに大きいホール的なものを保有しているところは「子供たちが発表の場に使える」、「学年が全員入って」、「外国とつないで」など、すごく使えるんですという話を聞きました。一方でそういうのがないところは、ホール的なものがあれば子供たちが活躍できるという話を聞きました。ホールを一から作るってすごく大変なことでしょうし、お金もすごくかかることなので、ホール一つの話だけではないですけど、まさしく本田委員がおっしゃったように、うまく連携できて、お互いいい形で貸し借りして一緒に使っていくような流れができればありがたいなと思いました。

○正司委員

扇形ないし馬蹄型の教室があるといいなと思うんですよね。今、中学校でも、小学校でも高校でも、普通教室で双方向の授業をやるために、先生方が列の間に無理して入ってやっておられますが、本当は扇形になっていると、本当に歩きまわって、生徒とディスカッションしながら授業を前に進めるということができると思います。そういう部屋が全部は無理でもいくつかあるだけで、大きなサイズでなくても1クラスサイズで構わないので、そのような教室があると、より教員と生徒がディスカッションのしやすい授業ができるかなと感じます。

○久元市長

教育長から雰囲気の話がありましたが、生徒がどう感じるかということですから、生徒の参画ということも必要かもしれませんね。正司委員からはデザインという話がありましたが、学校の

デザインって非常に大事ですよ。本田委員からは送迎スペースとか、保護者から見たバリアフリーの観点からも含めてですね、そういう配慮のご指摘がありました。学校環境のハード・ソフトのデザインというものを、生徒の皆さんにとって雰囲気がいいな、心地よいなと、学校にできるだけ長くいたいなと思えるようなデザインを作っていくということも今日の議論の中で非常に大事というのが改めて感じます。その時に、本田委員からも話がありましたように、企業とか外部の方の知見も求める。それから雰囲気については生徒にも参画してもらうようなやり方で、デザインを考えていくということが大事かなと思います。

本日の議論のまとめになりますが、やはり公立高校の役割というのは非常に大事で、幅広く高校教育の機会を市民に対して提供するものである。その意味で市立高校の役割というのは、しっかり果たしていかなければならない。そこは県立高校と無理に差別化を図る必要はないかもしれませんが、出来る限りこの地域に近い密着した存在であると。そしてグローバルな視点を持った神戸市民を育てていく役割を果たしていく。その際には地域との連携を大事にする。小学校、中学校、大部分の子どもたちは神戸市立の小学校、中学校を卒業するわけですから、市立高校に受け入れて、そのような教育を受けてきたつながり・連続性の中で神戸市民としてしっかり自立して活躍できるような人材を育成する役割を市立高校はしっかりと果たしていく。これらの役割を果たしていくためには、入試のあり方も含めた学科のあり方を議論するということと、デザインも重視をした施設設備の充実が求められるわけですから、そのような施設整備に取り組むこととしたいと。

ここから先は私からの提案ということになりますが、今日の議論を踏まえた今後の市立高校のあり方、そして施設整備の具体的なあり方を示すプランのようなものを、名前は考えてもらったらいのですが、例えば「市立高校の魅力倍増プラン」といったプランを秋ぐらいに作って、それに基づいて令和9年度の予算編成に臨む。また、このプランの作成過程には、外部の有識者や企業、あるいは生徒たちの参画も得ながら作成していくと。それから、プランの作成過程において、議会にもしっかり途中経過の報告をして、議会のご審議をいただきながら、ご意見を反映させるということも大事と思っております。このようなまとめ方でいかがでしょうか。（委員異論なし）

それでは、教育委員会において、市長部局も参画した形でプランの作成に向けて準備をしていただくということで、市立高校についてはここまでとさせていただきます。

3. 報告 「神戸市立学校園 働き方改革推進プラン_2.0」の策定について

資料2 『『神戸市立学校園 働き方改革推進プラン_2.0』の策定について』について、教育委員会事務局より説明。

○久元市長

このプランで述べられている「先生でよかったと思える毎日を」というのは、大変大事なことですよね。そのためには、神戸市で教員になりたいと思っておられる方を増やしていかないといけないと思います。今のところ、神戸市教育委員会の教員に対する志願の状況はどんなところでしょうか。

○教育委員会事務局

新聞報道等でもよくあるとおり、定員割れするところも多いんですけども、本市の場合、なんとか3倍程度の倍率を確保できているところでございます。ただ、まだまだ予断を許せないところですので、働き方改革の取り組み、例えば部活動の地域展開も含めまして、いろいろな取り組みをさせていただく中で、魅力アップを図っていかなければいけないと考えているところでございます。

○山下委員

とりわけ KOBE◆KATSU（コベカツ）については、市長をはじめ、市長部局の皆様方にも本当にご尽力いただき、また、もちろん教育委員会事務局も本当に熱意あふれる取り組みで、最初は大規

模な政令市でうまくいくのかなっていうのは懐疑的だったんです。しかしながら、全面的に展開
いただいて、見通しもだいぶ良くなってきて、どうやら聞き及ぶところでは中学校教員を神戸市
でと志望される方が増えていると伺っています。こうやって実際にご負担の時間が減る中で、子
供さんたちにもちゃんと向き合っていただける、またワークライフバランスも整ってきていると
いう点で、私が聞く限りでは、周囲の学生などからは、神戸市で働いてみたいという声をよく聞
いております。

○久元市長

先生方が授業に集中する、あるいは自己研鑽を積んで、授業力、授業に対する能力だとか、い
ろんなスキルを高めていくということが大事で、そのためにはできるだけそれ以外の事務負担を
減らしていくということも非常に大事なかなと思いますので、その辺はぜひ引き続き取り組んでい
ただければと思います。

4. 閉 会